

# 民族＝運命共同體説の吟味

中 野 清 一

## 一、テ ー マ

日常最も多く用ひられる言葉はそのまゝ最も明瞭な意味のものであるとは限らない。場合によつてはそのもつ意味の不鮮明である事がその言葉をして汎く用ひ易からしめてゐる事が尠くないであらう。而してこゝいふ種類の言葉の例としては今日數多くのものが考へられるであらうが中に就いて「民族」といふ言葉程明瞭を缺く事甚しいながらに普く用ひられてゐるものは他にないといつていゝ。聲の響きだけについてみるならば成程「民族主義の復興は一つの世界的事實」<sup>1)</sup>であるに違ひないがそれはそれだけ民族といふ言葉のもつ曖昧さをそのまゝ「復興」させ、この言葉の概念規定に於ける混亂ぶりをもう一度「一の世界的事實」たらしめた事を反面に於て意味してゐるといつていゝ。なによりもまづ集團理論でなければならぬ(尠くとも私はこゝ見てゐる)社會學はこの事實を前にして空しく拱手傍觀するの他はないのであらうか。若しそうなら集團現象の理論體系

1) 矢内原忠雄、「民族と平和」3頁。(昭和9年4月號中央公論所載)

であらうとする事を措いてはその面目を保ち能はぬ筈の社會學はどこにその存在理由を見出し得るといふのであらうか。こう考へるならば民族概念の本義を闡明するといふ事は民族主義が支配的な風潮をなしつゝある今の時代にとつて必要な事であるのみならず社會學の存在理由を明白且つ正當に示すためにもなされねばならぬ事に屬する。

だが然し社會學が民族概念の本質を積極的に明らかにしてゆく爲めにはこれに先立つてなさるゝべき一つの事柄が存在する。即ち既に多くの人々によつて試みられた概念規定の一々を端念に吟味し、類を以て聚め、一つの秩序にまで整理する事これである。若しこのいはゞ消極的な作業にしてなさるゝ事なく直ちに積極的な概念規定を試みようとするならば屋上更に屋を架するの愚を敢てするの虞れなしとしない。私がこの小論に於て民族の本質を運命共同體 *Schicksalsgemeinschaft*<sup>2)</sup> と見ようとする立場を吟味しようとする理由の第一は茲に潜んでゐる。従つて茲での吟味は積極的規定のために必要な消極的作業として要求さるゝ限度内に於てのみなされる。

翻つて考へて見る。民族に關する概念規定は數多く存在する。中に就いて先づ運命共同體説を拉し來つて考察しようとする理由はどこに存するのであらうか。この問ひに答へてゆく事はやがてこの小論の存在する理由の第二を明にする事を意味しよう。この點について私はこう考へる。(イ)曾て多くの民族研究者によつて民族理論の *Zankapfel* をなすものは實にスイスに於ける事實をどう説明するかであると云はれた。この點今日に於

2) *Schicksal* を運命と譯出した理由については茲では特に取出して述べないでおく。この小論を通讀さるれば自づから明になるであらうと信ずるからである。

てもなほ事情を同じくしはするがこれよりもより強い程度に於て民族理論の *Zankapitel* をなすものはソヴェ  
 ト・ロシヤに於ける民族についての理論であり現實であるであらう。スイスの現實をどう説明してゆくかに  
 民族概念指定の成否が懸つてゐる以上にロシヤ的理論と現實をどの程度迄説明しうるかと民族概念の見定めを  
 完全なものであらしめるためには念慮されなければならぬであらう。所でこの點を考慮してゆくためには一應  
 マルキシズムに於ける民族理論についての理解を正確にしておく必要が存しよう。この小論が吟味の對象に拉  
 し來らうとする運命共同體説はオットー・パウエル<sup>3)</sup>の所説に外ならないがこのパウエルの民族理論こそマルキ  
 シズム的民族理論の中に就いて最も理論的統一を有するものなのである。<sup>4)</sup>(ロ)今日行はれつゝある民族の本質に  
 ついての解釋の中最も有力なものであるかに見えるものは民族的性格の概念を中核としつゝ民族の本質を規定  
 しようとする立場である。ナチス的人種主義に於ても又イタリヤ的傳統主義にあつても更に又日本的な國民精  
 神主義にとつてもそれぞれ人種的事實の背後に考へられ、傳統的衿持の裡にもとめられ、國民精神の基底に於  
 て見出されつゝあるものは民族的性格に外ならないといつていゝ。所でパウエルによつて説かれた運命共同體  
 説は後に述べる様に民族を先づ性格共同體 *Charaktergemeinschaft* として暫定的に見定める事から出發してお  
 り、いつて見れば民族的性格を吟味し盡した究極に於て到達した立場に外ならない。従つて運命共同體説を吟  
 味するといふ事はやがて今日行はれつゝある民族解釋の中最も支配的であるかに見える立場を吟味するための  
 有力な手掛りを與へる事にならう。(ハ)パウエルの運命共同體説に關しては一般に多く知られてゐないのみでな

3) Otto Bauer; Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, Wien, 1924.  
 4) 理論的犀利の點に於ては Lenin の民族理論こそマルキシズム的民族理論の中にあつて最も優れたものであつたかもしれぬが Lenin の説く所は極めて斷片的なものに過ぎぬ。Lenin; Über die nationale Frage, Berlin, 1930. 参照。

くして有力なパウエル批判者の中にもかなりの誤解が存在してゐるのを見出す。數多くのパウエル批判者の中にあつて最も綿密に吟味しつゝある者は恐らくハインツ・チイグレル<sup>5)</sup>であると考へられるがパウエルに對するチイグレルの誤解の著しいものは運命共同體説を民族理論に於ける所謂客觀主義的立場に近きもの又は尠くとも客觀的要素と主觀的要素とのアンチテーゼの埒内に囚はれつゝあるものと見做しつゝある點であらう。だが然し事實に於て運命共同體説は客觀主義的立場に近きものでは決してなく逆に客觀主義と主觀主義との綜合點を見出しそこに民族の本質を規定しようとする立場であつたと考ふべき理由が充分に存在する。そのみならず運命共同體説は民族理論の數多くのものゝ中に見らるゝ上述客觀主義と主觀主義との對立に次ぐ第二の對立である所の民族を以て事實、現に存在する集團と見るか然らずして理念的にのみ存在する集團と見るかの對立に關しても或程度迄有力な解決のヒントを提供してゐる。しかもこの二つの對立を解かうと努力した程度に於て（この努力が成果を收め得たか否かは姑く別として）他の多くの試みにたち優つてゐるものがある。従つて運命共同體説を吟味するといふ事は一面現存する民族解釋の一つのものを吟味する事を意味するに止まらず民族解釋に於ける雜多困亂を整理するための有力な手がかりを提供する事となりもする。

以上この小論のもつテーマとこのテーマをとりあげた事の理由を明らかにした。なほ若干の事を豫め記しておく。パウエルが運命共同體説を展開した主著「國民性問題と社會民主主義」の題目から暗示される如くにパウエルは奥太利に於ける社會民主黨の民族政策を明にする意圖を恒に念頭にもつゝ論議を進めてゐる。従つて

5) Heinz von Ziegler; Die moderne Nation, Tübingen, 1931.

6) 茲に客觀的要素といふのは血統の同一、土地、文化、宗教、法的秩序、言語等の共同等を指し、主觀的要素といふのは意識、意志、感情に於ける共同を意味する。

パウエルの民族理論は言葉の廣き意味にこれを解する限り理論としての運命共同體説と政策論としての民族政策を論じた部分とを合せ含む。しかもこの二つの部分の間には若干の矛盾が見出される。だが然し運命共同體説そのものの吟味を企てようとするこの小論に於てはパウエルの民族政策論については姑くこれを考慮外においてゆく。又パウエルの場合他の多くの民族理論家に於て見られたと同様に民族と譯出さるべき *Volk* と國民と譯さるべき *nation* との二つの言葉に於ける嚴密な使ひ分けが存してゐない。然し本論に於ては煩雜を懼れてこの點に立入らず姑く同じ意味のものとして取扱つてゆく。

## 二、敘述

運命共同體説の吟味に入るに先立つてそれがどの様な内容を有し、どの様な思考過程を経過してゐるかを敘述してみよう。この敘述は既に前項に述べておいた様に運命共同體説が一般に知られてゐないといふ點からして必要とされてくるのみならず（より一層重要な事に）この立場が多く民族理論の一つの優れたる綜合を意味してゐるといふ點からしても必要でなければならぬ。

パウエルは民族を定義して次の様に言ふ、「民族とは運命共同體によつて性格共同體にまで結合せしめられた人々の總體である。」<sup>1)</sup> 又より簡明な形に於ては次の様に言ふ、「民族とは運命共同體の謂に外ならない。」<sup>2)</sup> では運命共同體とは如何なる意味のものであり、運命共同體によつての「よつて」„durch”とは如何なる事態を指し

1) O. Bauer ; a. a. O., S. 135.

2) O. Bauer ; a. a. O., S. 24.

たものであり、性格共同體とは如何なる内容のものなのであらうか。これらの點についてのパウエルの説明はそのまま運命共同體説の思考過程を現してゐるがこのパウエルの思考過程は絶えず民族の本質に關する雑多なる立場を整理してゆく作業と交渉を保ちつゝ経過してゐるのに氣づく。パウエルは諸種の民族理論を大體に於て三種の型に分類してゐる様に見える。その第一は「形而上學的理論」と呼ばれるもの、第二は「心理學的理論」と名づけられるもの、その第三は「各種の要素を擧げその結合によつて民族を規定」せんとするものである。右の中第一の立場は一般に客觀主義的立場と呼稱せらるゝものに屬する立場であり、第二のものは同様に主觀主義的立場として一括されるものに屬する。而してパウエルの運命共同體説は右の如き三種の立場に對してそれぞれ批判を加へながら展開せられてゐる様に考へられる。こう考へるのでなければパウエルの所論は正當に理解され得ないし、こう考へようとはしなかつた點にカウツキー及びチーグレルの運命共同體説に對する誤解の因つて來たる大部分のものが潜んでゐるといつていい。従つて以下の敘述を三段に分つて試みてゆく事は必要でもあり正當でもあるのみならず便宜でもあるであらう。

(イ)「形而上學的理論」との交渉――

パウエルが「形而上學的理論」と呼ぶ民族解釋上の立場は彼に従へば更に二種のものに細分せらるゝ。その一は「國民的唯物主義」の立場でありその二は「國民的精神主義」と名づけられる考方である。従つて茲に試みようとする第一段の敘述は更に二つの順序に分たれてなされなければならぬであらう。

(1)の一、「國民的唯物主義」との交渉――

茲に「國民的唯物主義」といふのはバウエルに従へば「民族の實體を一定の組織せられたるマテリーの中に、世代から世代へと傳へられてゆく胚種原型質 Keimpfama の中に發見<sup>3)</sup>」しようとする立場に外ならない。「自らの中から民族的性格を發生せしめてゆく神祕的な力をもつ固有な物質的實體<sup>4)</sup>」である點に民族の本質を發見しようとする立場に外ならない。バウエルは民族の本質を見定めてゆくためには現實の經驗に於て與へられてゐる事實から出發する必要があり而して現實の經驗は各民族が相互に異なつた「身體的及び精神的徵表」を有する事を訓へる。この徵表こそ暫く民族的性格と呼べるゝものである。所でこの民族的性格を説明してゆく事が民族の本質を規定してゆく事になるのであるがこの點に關して「國民的唯物主義」は胚種原型質の持續性に關するワイズマンの假説をそのまま援用して來ようとする。この假説に於て世代系列を貫いて類似性を保たしめてゆく所以のものが親から子に傳へられ生殖細胞中に不變不動のまゝ保存せられてゆく胚種原型質の中に求められてゐたのと軌を一にして民族的性格も又世代から世代に變化する事なく遺傳せられてゆく胚種原型質の現れに外ならずと國民的唯物主義は見てゆく。さてバウエルは右述べた如き立場に對して次の様に吟味しようとする。先づ第一にこの立場は「國民的精神主義」のそれに比すると民族本質の認識に於て一步を進めてはゐる。何故なら後に述べる様に國民的精神主義はその實民族解釋に於ける一つのタウトロジーを敢てするものであり且つ心理學的研究の進歩が既に廢棄し去つた所の「精神的實體」の觀念を墨守してゐるのに反して國

3) Bauer ; a. a. O., S. 12.

4) Bauer ; a. a. O., S. 121.

民的物質主義は親から子に肉體を通して遺傳せられてゆく素質の繼續といふ經驗的事實の觀察から出發しており且つ自然科學の進歩を以てしても猶不可缺少な物質の概念を用ひておるからである。だが然しそれにも拘はらずこの立場を妥當なものとして許容する事は出来ない。何故ならこの立場は「現代に於ける自然科學の發展によつて征服せられた所の因果概念」を基礎としてゐる。詳言すれば「生起するものすべてを結果させる力の擔載者は外部的な物質である」といふ風に理解してゆく場合の因果概念は「實體的因果概念」と呼ばれるが國民的唯物主義はこの種の因果概念を援用しようとし民族的性格といふ結果的現象の「原因」を遺傳する物質的實體に於て見出さうとする。然し自然科學の發展は「力」の概念を一定物質の中に含まるゝ神秘的な物として見る事を棄てゝ單なるある大いさとして眺むる様になつており従つて力の擔載者としての實體の概念を棄てゝあらゆる現象をエネルギーの變化とみてゆかうとしてゐる。従つて私共は國民的唯物主義に於ける如くに民族的性格の原因を胚種原型質の中に求める事から更に立入つてこの原因として擧示せられた不變の實體を「原因である一切のものが同時に結果として理解せられてゆく様な現象系列のうち投入」し、溯つて胚種原型質の原因そのものにまで吟味を及ぼしてゆかなければならぬ。

パウエルは國民的唯物主義を以上の如く理解し且つ吟味する事から一步を進めて積極的に次の様に説かうとする。民族的性格の原因としての實體的なるものゝ更にその背後に潜むものを取り出すために有力な手掛りを與へつゝあるものはダーウインの自然淘汰説に外ならない。而して自然淘汰説に於ける考方を援用して民族的

性格を説明しようとするならばこの性格の原因として擧げられた實體的な胚種原型質そのもの、由來をその民族の生活条件のうちに求めねばならぬ。各々の民族がその下にあつて始めて存在を維持してゆく所の諸条件こそ民族の生活を淘汰してゆくものであり、こゝに諸条件と呼べるゝものこそマルクスの意味に於ける「生産条件」に外ならない。而してこの生産条件は勿論「一定の物質」ではなくして「諸種の社會的現象の總體」なのである。かく考へ來るならば「民族の遺傳せられたる素質は過去の沈澱であり、いはば過去の凝縮せられたる歴史に外ならない。」<sup>5)</sup>ある民族に所屬する者が相互に肉體的にも精神的にも相類似するのは同一の祖先から生れ、生存競争に於て自然的及び社會的淘汰の道行によつて此の祖先が勝ち得た一切の素質が遺傳せられてゆくがためと見做すべきである。

バウエルは茲から更にもう一步をふみ出して次の様に考へてゆかうとする。生産条件である所の諸条件こそ民族的性格を説明する究極的なものであるとするならば民族をして民族たらしむる所以のもの、民族をして一つの集團たらしめてゆく所以のものは遺傳的事情を媒介として作用してゆく。遺傳によつて過去の人々の生活条件が世代から世代へと傳へられてゆくといふ道行をとつて謂ふ所の諸条件が決定的働きを及ぼしてゆく。この意味に於て遺傳といふ事情は民族をして一つの集團たらしむるためのいはゞ「手段」である。而してこの「手段」のみに着目していふならば民族は一つの「血統共同體」, „Abstammungsgemeinschaft“<sup>6)</sup>であるとみてもいゝであらう。「共同の血」によつて結合せられた集團であると見做してもいゝであらう。<sup>6)</sup>だが然し茲に考慮せらるゝ

5) Bauer ; a. a. O., S. 21.

6) Bauer ; a. a. O., S. 114.

べき三つの事情が存在する。パウエルは各所に於て散在的に断片的にこの三種の事情を指摘してゐるがその第一はこの遺傳といふ事、血統の同一といふ事は「手段」——よつて以て民族を一の集團たらしむる「手段」のすべてには非ずしてその一つのものでしかない事、その第二は遺傳、血統の同一といふ一つの手段が手段として作用しうるためには結合せしめらるゝ人々が相互に「交通共同體」„Verkehrsgemeinschaft“をなす事、「相互縁組」„Wechselheirat“の關係にたつといふ事であり、その第三はこゝに見た如き自然的事情のみでは充分ではなくその他に文化的事情が顧みられなければならぬといふ事である。而してこの三種の事情を考慮すべきものとしてパウエルが擧げたといふ事こそ彼がさきに民族をもつて暫く「血統共同體」であるとみてもよいと記した考方に自ら必要なる限定を加へた事を意味するものであり、これを別の側面から見るとすれば民族解釋に於ける人種主義的立場をある條件の下に立たしむる事によつて、パウエル自らの民族規定のうちに攝取しようとしたもの、いはゞ固有の意味に於てこれを止揚しようとしたものに外ならない。

右述べた如きパウエルの國民的唯物主義に對する批判、そこからする積極的踏み出しの中には様々な矛盾が勿論含まれてゐる。だが然しこの點に就いては次の項に於て吟味を加ふる場合に關説する事として茲では用語に於ける不用意についてさへも一切觸れずに置く。

(イ)の二、國民的精神主義との交渉——

茲に國民的精神主義といふのは民族の本體を神祕的なものとして見定められた民族精神の裡に求めようとする

ものであり、ローマンチケルン及び歴史法學派の人々によつて説かれた立場であるとパウエルは理解しようとする。民族の一切の行動、すべての特質を歴史的に不變不動の形に於て維持せられてゆく民族精神の顯現であると思ふ。この立場に於ては恰も國民的唯物主義の場合遺傳的物質が民族の實體と考へられてゐたのと同様に民族精神が實體であると見られてゆく。この様な考方に對してパウエルは大體次の様に立場を構へてゆかうとする。第一に一個の精神的實體の存在を認めてゆくといふ事はカント的な理性批判を訓へられた今日許容し得ざる事柄であり非科學的な考方に固執するものに外ならない。今日の心理學は經驗的事實としての個人の表象、感情、意欲等をすべて何等か實體的なものゝ外部的現象形態とみる事を廢棄してこれらを個人相互間の相互的影響によつて説明しようとする。この意味に於て民族精神と呼ぶるゝ如きものは「浪漫的幻影」„romantisches Gespenst“ 以外の何ものでもない。第二に今一步を譲つて一個の實體としての民族精神の存在を容認するとしてもかゝるものとしての民族精神とは果してどれだけの事を意味してゐるのであらうか。何等の具體的内容をも有せざる「空虚なる言葉」であるに止まるか又は何等かの内容を有する事ありとすれば極めて抽象的に考へられた程度のものでしかあり得ない。第三に民族精神といふ立場から民族の本質を説明しようとする考方は説明せらるゝべきものを既に前提として含みつゝ説明してゆかうとするものでありこの意味に於て一つのタウトロギーにすぎない。民族精神それ自體が説明せらるゝべきものであつてかゝる概念を以て民族の本質を明にしようとする如きは説明には非ずしてその實他の言葉を以ておき換へたものに外なら

ないといつていい。

パウエルは右の如き觀點に立ちつゝ國民的精神主義の立場を否定しようとする。だが然しこの立場のすべてを否定する事を以てパウエルは萬事足れりとはしてゐる譯でない。恰もさきに述べた如く國民的唯物主義の立場を一應否定した上でそこから科學的に見直された手掛りをひき出し民族本質の積極的措置に役立つ所あらしめようとしたのとその軌を一にしてパウエルは國民的精神主義からとりうべきものをとらうとしてゆく。では如何なる形に於てゝあらうか。手掛りは民族精神といふ如き表現をさけてこの言葉によつて總括的に言ひ現はされてゐると考へられる具體的現象、例へば法律、藝術、慣習等の、適確に表現するならば文化的現象といふ言葉に置き換へてゆく事の裡にひそんでゐる。私共はさきに自然的事情ともいふべき遺傳現象は、人々をして民族といふ一個の共同體にまで結合せしむる一つの手段ではあつても手段のすべてゝはない事を指摘しておいた。若し自然的事情のみを以てして充分であるとするならば極端な場合を考へて僅少な人々のみを残して殘餘のすべての人々が何等かの事情によつて死滅し去りこれに伴ふて一切の言葉、習慣、生活様式等の文化的事情が消滅しさりかゝる姿に於て殘存せる人々が生活を繼續すべく餘儀なくせしめられた場合を考へても見よ。遺傳現象はなほ依然として作用しつゞけてゐるであらう事は疑ひを容れない。もし遺傳的事情のみを以てして民族といふ集團の持續が可能であるならばこの極端な場合に於ても民族としての存續は可能であるとみねばならないであらう。だが然し事實に於ては然らず一切の文化的事情を奪はれたこれらの人々が若し依然として民族

といふ集團形態に於て生活しつゞける事これありとせばそれは従前の民族とは全く別異なる民族のうちに入りくみたるもの、新しき民族を構成したるものに外ならない。蓋し個人的差違、従つて又民族的差違は遺傳的事情にまつのみならず文化的事情にもよるものだからである。そのみではない。若し遺傳的事情のみにまつとするならば民族といふ集團は自潰の一途を辿るの外はないであらう。蓋しモリツ・ワグネルの指摘した様に人口増加に伴ふて地方的分散が始まりこれによつて新しき條件の下にたつ事となり、この新條件の作用によつて新しき淘汰作用が營まれ新しき素質が結果される事となりかくして當初の統一的集團は分散崩潰せられてゆく事となるからである。かくしてこゝにこの崩潰作用に屹抗してゆくものとして文化の共同といふ事情が考慮せらるべきものとなつて現れてくる。この意味に於て民族は一面「血統共同體」であると共に他方「文化共同體」„Kulturgemeinschaft“である性質をもつ。

一步を進めて考へる。私共はさきに遺傳的事情はその實究極的なものではなくしてその背後にまで立入つて吟味を進めるならばこの事情を結果せしめたものとして生存競争に於ける生活條件が根抵に横はつてゐる事實を發見した。所でこゝに文化的事情として考慮しつゝある事柄についても同様な事が言へはしないか。謂ふ所の文化的事情はその實その根抵を「生産並びに生計分擔の一定様式」<sup>7)</sup>に於てもつてはゐないであらうか。この根本的な生活條件がそのまゝ歴史であるとするならば文化的事情は自然的事情同様に歴史によつて規定せられつゝあるものとなつて來はしないか。若しこゝ考ふる事にして妥當であるならば文化的事情による文化的共同

7) "Verteilung des Lebensunterhaltes"

體はその實歴史に於ける共同の結果的現象としてみるべきものとなつてくる。積極的にいふならば文化的事情は決定的事情としての生活諸條件がよつてもつて人々を民族といふ集團にまで結合せしめてゆくための——この決定作用に當つて用ひてゆく一つの手段に外ならない。

以上(イ)の一及び二に於て國民的唯物主義並びに國民的精神主義を吟味し批判する事から積極的に民族の本質を規定するための手掛りを發見しようと努めた。これを綜合していふならば民族をして民族たらしむる根本の事情は人々のおかるゝ生活條件——歴史に外ならず自然的事情及び文化的事情はこの根本的者がその作業を營んでゆくに當つて用ふる二個の手段にすぎない事となつて來た。所で今に到るまで生活條件——歴史として言ひ現し來つたものを適確に表現してみるならば「運命」„Schickal“に外ならないといつていゝ。かくして民族をして民族たらしむる所以のものは實に「運命」の共同に外ならない。民族とはかく考へ來る限り一個の運命共同體であるといつていゝ。血統共同體として又文化共同體として考へられた民族は根本的には運命共同體なのである。だが然しこれだけですべての積極的規定が終つた譯では決してない。そのためにはなほ民族解釋に於ける他の立場を吟味批判する所がなければならぬ。

(ロ)「心理學的理論」との交渉——

民族解釋に於ける心理學的立場とパウエルが呼ぶ所のものは普通に主觀主義的立場と稱せらるゝものを指す。嚴密にいふならば主觀主義的である事が直ちに心理學的立場にたつ事を意味するものではなく例へばパウ

エルによつて國民的精神主義と呼びなされたものも心理的現象に説明因子を求めてゆくといふ意味に於ては普通にいふ所の客觀主義的立場に屬しつゝしかも心理學的立場の側にたつとみねばならぬものであるが今この點は姑く措いて問はない。パウエルに謂ふ所の心理學的立場といふのはある一定の集團に共通に所屬してゐるといふ事についての意識なり、共通に所屬しようとする意欲なり、共通所屬についての誇りの形での感情なりの中に當面の人々をして民族といふ集團にまで結合せしむる所以のものが含まれてゐると見てゆく考方を指してゐる。パウエルはかゝる考方に對して次の様に批判吟味を加へてゆく。共同所屬の意識の裡に民族の本質を求めてゆかうとする考方は「人々が民族の客觀的徵表を發見し得ざる場合、民族を結合體たらしむる紐帶を或は言葉の中に或は血統の共通の中に更に或は國家への共同所屬の中に見出さうとする一切の企てが民族的現象の複雑多岐なる事情に阻まれて失敗に終つた場合」<sup>8)</sup>に現れてくるし、民族が民族として統一的な行動に出てゆく場合には不可缺の前提としてこの統一體についての意識の自覺が必要である事を考ふるならばある程度まで無理からぬ考方に屬するといつていゝ。だが然し先づ第一に共同所屬を意識する人々の總體が民族である事が正しいとするならばある人々が恒に特定の人々とのみ共同所屬を意識し、この特定の人々以外の者とはこの如き意識をもたないといふ事實は、如何なる理由に基くものであらうか。この立場では限なく説明し得られない。人々をして特定の人々とのみ共同に所屬すると意識せしむるこの「解き得ざるつながり」は共同に所屬する事についての意識それ自體の中に説明原因をもつてゐるものとみる事は出来ない。この點に於て心理學的立

8) Bauer; a. a. O., S. 140.

場は私共をして十分に満足せしめてくれない。更に第二にこの立場は獨り満足せしめぬのみならず妥當ならざる解釋の上にたつ。すべての民族を構成する人々がその共同所屬を恒に意識してゐるといふ事は果して事實であらうか。第三にこの共同所屬の意識はその集團自體の埒内にのみ人々が止る限り、換言すれば他の集團との交渉を全くこれなしとする限り起り得ざる事柄に屬しよう。第四にこの意識はそれ自體原因には非ずして一つの結果とみるべきものに屬する。意識せらるべき事實が先づ與へられるのでなければこの事實についての意識は生じ得ない筈である。この意味に於いて共同所屬の意識は「民族的存在のみよりして理解しえらるるものであつてその逆ではない。」<sup>9)</sup>とみななければならぬ。以上は共同所屬の意識のみについての所説であるがこれに對して下した批判はそのまま同様共同所屬の意慾、感情の裡に本質を求めようとする立場に妥當してゆく。この點は自明であると思ふが故にこれ以上立ち入らない。

唯右の如き意識、意慾、感情相互の間の連絡を明にする事から積極的規定に進む手掛りをパウエルがどう發見しようとしたかを附記しておく。民族的意識はそのままで直ちに民族的行動の規定原因たりうるものではなくそのためには民族的感情なり意慾なりを伴はなければならぬ。前者は後者を促し、而して後者を促す事を通してのみ具體的的民族行動の動因たりうる。しかもこの動因としての意識が民族的存在、積極的にいふならば運命の共同といふ事實の結果的現象である事既に見た所の如くである。かくしてパウエルは心理學的立場を唯その雜然たる姿に於て眺めこれに對して自らの立場を積極的に見定める所あらうとしたのみではなく心理學的立

9) Bauer; a. a. O., S. 49.

場の様々なるものを論理的に一定の秩序にまで齎らしつゝこの秩序づけられたものに對して一定の立場を統一的に構へてゆくといふ風の周到な用意を示してゐる。バウエルの民族理論が優れたものである一つの事情はこの點にも見られてゐるといつていい。

(ハ) 民族を構成する諸要素を列擧しようとする立場に對する交渉——

バウエルはこの立場（最近フェルスが有力に代表しつゝある立場である<sup>10)</sup>）の著しきものとしてノイエマンに<sup>11)</sup>従ひつゝ「ある伊太利の社會者達」の所説を念頭にしつゝ論議を進めつゝある。この所説に従へば民族を構成する要素としては次の六種類のものが考へ得らるゝ。第一、共同の居住地域、第二、共同の血統、第三、共同の言葉、第四、共同の道德及び慣習、第五、共同の體驗、共同の歴史的過去、第六、共同の法律並びに共同の宗教が即ちこれでありこれらの諸要素の相まつ所に民族が統一的集團として現れてくると見做されてゆく。かかる立場に對してバウエルは次の様に吟味批判を加へてゆく。先づ第一に右に擧示せられた六要素の中第一のものを姑く別として考ふるならば他の五要素はすべて第五のものに於て究極的原因を有しつゝあるものである事に氣づく。如何なる素質が遺傳せしめられ如何なるものが除外せられてゆくべきかを決定するものが生活條件であり共同の歴史に外ならないとするならばこのこそ共同の血統を決定しつゝあるものである。又第三、第四、第六の三要素は何れも一括して文化的傳統の共同といふ風に總稱する事を許すものであるとするならば既に(イ)に於て見た様にこれらのものすべては何れも第五のものによつて究極的に決定されつゝあるもの

10) J. Fels; Begriff und Wesen der Nation, 1927.

11) Fr. J. Neumann; Volk und Nation, 1888.

となつてくる。所で茲に附記すべき若干の事情が存在する。第三、第四、第六何れも共通の原因を第五のものに於て持つてはゐるが、そして又この意味に於てこれらのものは第五のもの決定作用を營んでゆくに當つて用ふる「手段」、「道具」たるものに外ならないが仔細に見るならば右の中第三のもの即ち言葉は他の二者が第一次的意味に於て手段たるに比しては第二次的、副次的意味に於ける手段たるに止る。何故ならば第四、第六は何れも直接に第五のものゝ活動に當つての手段たり得るが第三のものゝみはこの第四、第六のものゝ活動するたゝめ的手段たる地位を通して第五のものゝ手段たる立場にたつものだからである。共同の言葉は共同の道德、慣習、法律、宗教等の現實に活動してゆくための手段として存在し、かゝるものとして存在する事を通じて共同の歴史のための手段たる地位にたつてゆくものと見るべきであるからである（私共は茲にパウエルに於ける雑多なる立場の整理が極めて秩序的になされてゐるのを看取すべきである。この秩序的整理が妥當であり得たか否かは姑く別としても）。かくして第一のものを除いた残りの諸要素について「體系」的整理が施された。この整理から私共は一つの重要な歸結をひき出して来る事が出来る。これらの各種類の要素を擧示する人々が従來理論的困難を感じつゝあつた事柄はある場合にあつてはある要素が缺けてゐる事があるといふ事情に外ならなかつた。この點に關して前述の體系的整理からして次の様な説明を施してゆく事が可能になつてゆく。共同の血統も共同の文化も等しく同一なる決定原因の作用に當つての手段にすぎぬとするならばこの兩手段が同時に存せねばならぬ必要は消滅する。のみならず等しく共同の文化と呼べるゝ事情の中にあつても例へば共同の

法律は民族結合の有力な手段ではあるが、必ずしもなければならぬ性質のものではない。同一の事は共同の宗教、道徳、慣習についてもいへる。又言葉の共同といふ事についてもこれがなければ文化の共同は考へられず従つて又民族共同體はない事とはなるが言葉の共同が存しただけでは民族共同體が直ちに結成されてくる譯けのものでない事も右述べた如き事情から理解せられてくる。更に一步を進めて以上の考察に於て考慮外に措かれつゝあつた要素即ち第一のものである共同の居住地域について考へてみよう。血統の共同も文化のそれも住居する地域を異にすると共に（この事情が相互的交渉を不能にする程度のものであるとすれば）失はれてゆく事實は歴史が豊かに物語つてゐる。この點に着目する限り土地の共同は確かに民族の「存在諸條件の一」をなしてはゐる。だが然し無制約的にそうである譯のものではない。土地の分離にも拘はらず血統なり文化なりの共同が可能ならば依然として民族は統一を保持しうる。例へば獨逸文化によつて影響せられつゝ（書物、新聞等によつて）現に亞米利加に生活する獨逸人は土地の分離にも拘はらず獨逸民族に所屬するものたる事を失はない。もし然りとすれば土地の共同は唯それが民族結成の他の機縁の必要なる前提たる地位たる場合に於てのみ民族の「存在諸條件の一」たる事が出來ると考へなければならぬであらう。而してこの點に着目してゆくならば土地の共同といふ事情は嚴密には民族共同體の構成諸要素の一として他の諸要素に並列せしめられて考へらるゝべきものではなくして實は他の諸要素「活動の條件」と見做さるゝべき性質のものである事が明らかになつてくる。かくして以上述べた所を概括していふならば六要素中究極的なものは第五のものであり、第二

及び第四、第六はそれぞれ自然的事情、文化的事情として第五のものゝ作用手段たるもの、第三のものは第四及び第六のものゝ作用手段である事によつて第五のものゝ作用手段となつてゆくもの、最後に第一のものは第二、第三、第四、第六のものゝ活動條件たる地位にあるものといふ風になつてくる。

以上バウエルの運命共同體説の内容をその思考過程に於て三段に分ちつゝ理解する事に努めて來たがこれを概括するならば次の如きものとならう。國民的唯物主義も國民的精神主義も何れも一つの實體のうちに民族の本質を求めんとする客觀主義的傾向に屬する。バウエルはこの立場における實體の根柢に横はるものにまで溯つて運命の共同といふ事實に到達した。又主觀主義的立場に對してこの立場に於ける主觀的氣組はその實客觀的存在の結果にすぎざるものである事を指摘する事によつて茲でも運命の共同といふ事實こそ根本的なものである見定めに辿り着いた。更に又各要素列舉主義(?)に於ける一々の要素を吟味した結果同様運命の共同といふ一要素が最後のものである事實を確め得たのであつた。

以上に添加して考慮せらるべき三つの點が存在してゐる。その第一。運命の共同は既に見た様に自然的事情、文化的事情に於ける共同を結果した。この事は若し自然的事情、文化的事情に於ける共同が別様に表現して性格の共同といふ事を意味するものであるならばやがて又運命の共同が性格の共同を結果して來てゐる事を意味するものに外ならない。かくして民族が性格共同體であるといふ事はやがてそれが運命共同體である事の當然の歸結でなければならぬ。バウエルが民族を定義した言葉の中に「運命共同體によつて性格共同體にまで

結合せしめられた……。」とあるのはこの間の事情を物語つてゐる。その第二。若しこの運命の共同といふ事實の内容が生活條件を意味し、労働方法、生産力、生産關係を意味するものであるならばそれ自體歴史を通じて固定不動の姿に於て存するものではなく絶えず前進しつゝあるものであり、従つて民族が運命共同體であるといふ事は民族といふ集團が恒に發展しつゝある集團である事を意味するものとなつてこなければならぬ。パウエルはこの點に關してゲルマン人の場合に具體例を求めつゝ仔細に集團としての民族の具體的内容が次第にその豊富さを加へ來つた経路を敘述してゐる。<sup>12)</sup>この點に於てパウエルの民族理論は民族を事實としての集團と見るかそれとも理念としてのそれとみるかの對立を克服しようとする一つの試みを提供しつゝあるものであり又カウツキー、レーニンその他のマルキシスト的立場にたつての民族理論に於ける用語の甚しき困亂を豫め避けんとした用意を示しつゝあるものと見ていゝ。パウエル民族理論の優れたものである事情の一はこゝにも窺はれよう。その第三。民族が運命共同體に外ならないと見られてゆく場合、直ちに起り來るであらう疑問は民族のみが唯一の運命共同體たるものであるかといふ點であらう。換言すれば民族以外に運命共同體は存しないかといふ點である。パウエルはこの點に關し注意深くも次の様に豫め誤解を避けようと努めてゐる。手掛りは共同體の意味を精密に見定めておく事のうちにひそむ。共同體とは唯單にその成員の類似 Gleichartigkeit の故に結果せられた集團を漠然と指すものではない。<sup>13)</sup>従つて運命共同體といふならば嚴密には「同様な運命の下にたつ事を意味するのではなく、相互の不斷の交渉、絶えざる相互作用の姿に於て同一の運命を共に體驗する

12) 前掲書26頁より109頁。

13) 前掲書112頁。なほ Bauer における Gemeinschaft と Gesellschaft との言葉の使ひ分けに關しては同上書127頁脚註参照せられたく、Tönnies に於けるとは全く異なつた用法を示してゐる。

事を意味する。<sup>14)</sup> 具體例について見るならば資本主義の發展と共に獨逸人と英國人は「同様な運命」の下にたゑる事となつたし、今日世界の無産階級は「同様な運命」の下にたつてはゐるがこれらはあくまでも唯「運命の類似」を見せてゐるといふに止るのであつて「同一の運命を共同に體驗」しつゝあるものと見る事は出来ない。従つてこの點から民族を定義するならば、民族は „die nicht aus Gleichartigkeit des Schicksals, sondern aus Schicksalsgemeinschaft erwachsende Charaktergemeinschaft“<sup>15)</sup> とし、事となつてくる。

### 三、吟 味

既に見た様にバウエルの運命共同體説は擧ぐるに暇なき程夥しき數に上る民族理論の中にあつて最も優れたるものゝ少くともその一つであり得る數々の特長をもつてゐる。そしてこの特長の殆んど總ては多くの民族理論を巧みに整理し秩序づけ以て自説のうちに止揚しようと企てた點に關聯してゐるのを發見する。チーグレルがかんりの誤解を有しながらもバウエルの民族理論を目して「わけても最も興味ある包括的試み」<sup>1)</sup> であるとしたのも理由のない事ではない。にも拘はらずなほ私共はバウエルの民族理論に満足し得ざる點を數々持つ。以下順を追ふてこの點を説明しよう。

(イ) バウエルの運命共同體説はわけても三人の思想家の強き影響の下にたちつゝ試みられてゐる。ダーウイン、カント、マルクスの三人が即ちこれである。勿論運命共同體の概念それ自身がこれらの人々の所説から直

14) 前掲書 112 頁。

15) Bauer; a. a. O., S. 113.

1) H. O. Ziegler; a. a. O., S. 49.

接ひき出されてゐる譯ではないがこの結論に到り着く迄の思考過程に於ては有力な理論的武器の多くをこれらの人々から借用してゐる。民族を血統共同體とみる見地をパウエルが止揚しえたのはダーウインの淘汰説の援助によつてであつた。民族精神の實存から民族の本質をみてゆく立場を批判するに當つてパウエルが據り所としたものはわけてもカントに於ける理性批判に外ならなかつた。<sup>2)</sup> 所謂運命の内容を明にしてゆく場合パウエルはマルクスの唯物史觀に於ける考方を援用しつゝある。<sup>3)</sup> こゝで私共はパウエルに向つて問ひを發しなければならぬ。これらの人々よりする理論的武器の援用の點に於て果してパウエルは正しきを期し得たであらうか、過誤に陥る事なきを保し得たであらうか。カントとの關係に關する限りこの問ひは肯定的に答ひ得られよう。だが然しそれとても唯カントに於ける理性批判の意味を獨斷論の排撃にあつたと理解する限りに於てであり若しカント解釋の重點を近時の傾向が示す様に實踐理性批判に於てゆくとすればパウエルのカント援用はカントにとつて好ましからざる亂用であつたと見られてゆく危惧は充分に存在して來る事にならう。だが然し今はこの點に立入らない。この小論の意圖する所からかなりかけ離れた領域——カント解釋に關する是非の論議にまで筆を進めねばこの點の吟味が正鵠を期し得まいからである。唯カントの民族理論は所謂地縁を重視する土地共同體説の立場にある事及び地縁の説明に際してかなりの程度に於てパウエルが極力斥けて止まなかつた實體論的見地に接近してゐる事を指摘しておかう。<sup>4)</sup> ダーウインとの交渉に就いてはどうであつたか。私共はこゝに優れたるダーウインニズム批判者であるオスカー・ヘルトウィック<sup>5)</sup>を想ひ起して來なければならぬ。ヘルトウイ

- 2) Bauer は第二版序文に於て自らが Kant の批判哲學の影響の下にたつてゐる事を明記してゐる・前掲書 XI.
- 3) 第一版序文にはマルクス的方法を民族の問題に應用してゐる事が本來の意圖でありこの意味に於てこの主著が „Marx-Studie“ である所以を誌してゐる。因にこの主著は Max Adler 及び Rudolf Hilferding によつて編纂せられた Marx-Studien の第二卷をなすものである。

ツクはベルナルデイ、コッスマン等に於ける政治的ダーウイニズムの考方——國家・民族間の戦争をダーウインに於ける生存競争の概念と同一視し前者を目して「一つの生物學的必然」と見てゆかうとする考方を批判してゐるがその中について次の二點、即ち第一、ダーウインの生存競争による自然淘汰の假説はダーウイン自らによつて一つの前提、「植物並びに動物の多きにすぐる増殖」といふ前提の下にたてられてゐるのに反して政治的領域に於ける戦争はこの必要なる前提をもち得ないといふ意味に於て自然淘汰になぞへらるゝべき現象ではないといふ事及び第二、生物界に於ける自然淘汰はその生物の全生命、従つて又その全細胞を劣敗生物の場合には死滅に導くのに反して民族間の戦争はかゝる事態にまで及ばない點から見ても戦争を自然淘汰とみる事は誤りである事の二點<sup>6)</sup>はそのまま、又は尠くとも表現を若干變へてパウエルの場合にも妥當して來はしないであらうか。又ダーウインの意味に於ける生存競争は一定領域に限定せられざる普遍的原則として考へられてゐた筈であつたがパウエルはこれを社會的な領域に移して以て一定地域に限定せらるゝ傾向をもつ民族の現象を説明しようとしたがこの點に於ても比論の誤謬はなかつたであらうか。轉じてマルクスとの交渉について考へて見る。パウエルがマルクス的方法を援用し唯物史觀に於ける諸概念を民族解釋のために用ひつゝある事は疑ひを容れないが用語法、概念規定に於て若干の混亂はなかつたであらうか。例へば生産條件といふ用語がどれ程の内容のものとして用ひられてゐるかの點に於ける曖昧さは姑く措くとしてもこの生産條件を目して唯漠然と「様々なる社會現象の總體」と呼びつゝある如きはマルクスの意圖に背いた亂用ではなかつたか。更に又こ

4) Immanuel Kant; Anthropologie, 1798.

5) Oscar Hertwig; Zur Abwehr des ethischen, des sozialen, des politischen Darwinismus, 1921.

6) O. Hertwig; a. a. O., S. 100 f.

の生産條件を民族組成の決定的原因としてみてゆく考方とダーウイン的意味に於ける生存競争を決定的なものとみてゆく見方との間にはどういふ關聯がバウエル自らによつて注意深く看取られてゐたであらうか。この點に關してバウエルは兩者を無雜作に場合々々に應じて用ひてゆくといふ風に秩序づける事なく併用してはゐなかつたであらうか。

(ロ) バウエルは運命の共同を以て民族組成の決定的原因であると考へようとした。數多の民族理論に於て掲げらるゝ諸要素は何れもこの決定的原因の結果又は作用手段としてみるべきもの若くはこの決定的原因によつて規定されつゝあるものゝ前提にすぎぬと考へようとした。だが然し運命の共同それ自體がこれらの諸要素のうちのあるものゝ結果として現れてくる場合はなかつたであらうか。例へばユダヤ民族に於ける宗教の共同、人種的起源の共同(よしこの點の共同が事實におけるそれではなく漠然たる通俗的解釋に於けるそれに過ぎなかつたとはいへ、而して又若しこの點の共同が通俗的な思ひこみにすぎなかつたとするならばこの思ひこみの共同)、慣習の共同がユダヤ民族の運命に於ける共同を結果したのではなかつたであらうか。既にしてバウエルは屢々運命の共同といふ言葉を歴史の共同といふそれを以て置き代へてゐるがこの事實は運命といふ概念の中に運命によつて決定さるゝ他の要素をその實自ら含ましめて考へつゝあつた事を物語つてはゐなかつたか。更に又バウエルによつて秩序づけられた民族組成の六要素の中土地の共同はその實未だし秩序づけられてはゐなかつた事に氣づく。なるほどバウエルは土地の共同といふ事情を民族を集團づけてゆくに當つての運命の共同

といふ事情の作用するための手段たる自然的及び文化的事情の前提をなすにすぎぬものと解する事によつて一應秩序づけ得たかに見える。だが然し自然的及び文化的事情の前提としての土地の共同といふ事情と二前者の究極的原因として考られた運命の共同といふ事情との間にはどういふ意味の連絡が考へられてゐたであらうか。この連絡が明確に跡づけられるのでなければ土地の共同といふ事情は未だ充分な形に於て秩序づけられてゐるといふ事は出来ないであらう。勿論バウエルは運命の共同を以て他の要素の決定因と考へ土地の共同を以て他の要素の前提たるにすぎぬものといふ風に規定の使ひ分けを試みておるしこの點によつてこの二つの事情の間の連絡の姿は一應推定に難くないかのように見える。けれども一は決定因、他は前提であるといふのは論理的に見てどれ程の區別をもつものとしてバウエル自身考へてゐたのであるかは明確を缺いてゐる。この點の説明が明確に施されない限り兩種の事情は唯言葉の上に於て區別せられたものであるに止り相互の連絡は依然明らかならざるまゝ残る事となり従つて又土地の共同といふ要素の整理に於て用意缺くる所あつた事を意味する事とならう。而して一步を進めて言ふならばこの點に於ける用意の缺乏は直ちに運命の共同を以て決定的なものと見てゆく事が充分な形に於てなされてゐなかつた事を意味するものとなつて來はしないであらうか。

(ハ) バウエルは民族解釋における主觀主義的立場と客觀主義的立場との對立を止揚しようとし且つ要素列舉主義の立場をも克服しようとしたのみでなしに民族を事實に於ける集團であるとするか、然らずして理念に於ける集團であるとするかの困難なる問題についても勿論明確な意識に於てはなかつたが當面し解決しようとするか、

した。今姑くこれらの點に於ける止揚なり克服なり解決なりが妥當なものであつた事を許容しつゝ論議を進めてみよう。この止揚、克服、解決の各々の立場相互の間に果してバウエルは矛盾なきを保し得てゐるであらうか。答は否定的に與へられて來る。主觀主義的立場と客觀主義的なるそれとの間の對立を止揚してゆく場合並びに要素列舉主義を克服してゆく場合に於けるバウエルの觀點は民族といふ一つの集團を固定的なる姿に於て思ひ浮べつゝある。論理的に見ても民族を固定的な姿に於て眺めつゝゆくのでなければこれらの雜多なる立場の止揚、克服は可能ではなかつたであらう。これに反して民族を事實に於ける集團とみるか理念に於ける集團とみるかの問題を解決してゆかうとする場合にバウエルの據りつゝある觀點は民族を絶えず生成しつゝある集團として見てゆく立場である。絶えず生成しつゝある集團とみる事によつて民族は一面過去及び現在に於ける集團でもあれば他方將來に於ける集團でもありうる事となるとバウエルは考へようとする。かくして右の如き止揚、克服の仕方と解決の企てとの間には各々の立ちつゝある觀點の相違が存在してゐる事に氣づかざるを得ない。この事は一步を進めて言ふならば獨り觀點に於ける矛盾を意味するものであるのみではなくしてバウエルが民族を集團として眺めてゆく場合根本的にはこれをどういふ性質のものともみてゐたかに關する疑義をバウエルの民族理論に接する者の間に起さしむる事情となつてはゐないであらうか。

(二) 民族を流動し生成しつゝあるものと見てゆくバウエルの考方について吟味を加へて見よう。バウエルが民族といふ集團を目して流動しつゝあるもの生成しつゝあるものと見る場合彼が民族を構成する人々の範圍に

於ける擴大を思ひ浮べつゝある事は疑ひを容れないであらう。民族のいはゞ量的擴大の事實をパウエルは念頭にしつゝあるのである。パウエルは言ふ、「……民族的文化共同體の三種のもの」が存在する、その第一は「村落共產體時代に於けるゲルマン人」によつて示された如き一切の人々を包括する民族であり第二は「階級區別の基礎の上にたつ社會」に於て見らるゝ如き特定の人々（中世に於ける貴族、近世におけるブルジョアジ―及び知識階級）のみの範圍に限定せられ多くの人々を埒外に置きつゝある所の民族でありその第三のものは「將來の社會主義的社會」に於てみらるゝ如きすべての人々を構成員として包括する所の民族である<sup>7)</sup>。かくの如きパウエルの理解に對して私共は次の如き問ひを發しなければならぬ。量的に見て擴大しつゝありこの意味に於て流動し生成しつゝあると考へられた民族の三種の類型を一括して民族といふ共通なる名稱の下に屬せしむる事を許容する所以のものはどこに求められてゐるのであらうか。恐らくパウエルは運命の共同といふ事實がこれらの三種の類型を通じて共通に存在してゐるといふ事情を擧げてこれに答へようとするであらう。所で運命の共同といふ事實はいはゞ客觀的なる事實であらう。意識するにせよせざるにせよそれとは關はりなく存在する事實でなければならぬ筈である。尠くとも民族の本質にこの事實を擬してゆくパウエルの立場から見るならば右の如きものである事が認められなければならぬ。蓋し若しこの事實についての意識が必要であるならばそれはそれだけ民族解釋に於ける主觀的立場に接近する事となり「民族的意識は民族的存在からしてのみ理解せらるゝべきものでありその逆ではない」とするパウエルの立場が見失はれる結果とならざるを得ないか

7) Bauer; 前掲書 III 頁以下。

らである。果して運命の共同といふ事實にして右に見た如く客觀的な事實であるとするならばバウエル自ら舉示した例についていふならば第二の型のものは何故に多くの人々をその圏外におきつゝあるもの、特定の人々のみ限られつゝあるものなのであらうか。第二の型のうち中世に屬する場合は措くとしても近世から現代にかけての民族は尠くとも運命の共同といふ觀點からは、而して又この運命の共同といふ事實が上述の如く客觀的なものである限りは特定の人々以外の多くの人々をも包括するものとなつてくる筈でなければならぬ。バウエル自らも又「運命の共同」と「運命の類似」との二つの用語を區別しつゝある場合に用ひつゝある例に於て労働者は他國の労働者と「運命の類似」を持ちはするが「運命の共同」を有するものではない事、労働者は自らの國の資本家その他の人々と「運命の共同」をもつ事、この故に労働者は民族に所屬する事を指摘してゐる。それにも拘はらず第二の型の「民族」の範圍を特定の人々に限らうとするのは如何なる理由に基いての事なのであらうか。特定の範圍に限定する事それ自體が正しいか否かの詮索に立入る必要は勿論ない。然し假りに正しいと見て議論を進めるならばこの特定の範圍に限定するといふ事はそれ自體運命の共同といふ事情以外の事情を理由としてのみ可能なものではなかつたか。かく考へ來る事が許さるゝ限り民族の量的範圍の擴大といふ事柄はそれぞれ異なる標準から指定せられた範圍について云々されてゐる事となつてくる筈である。若し標準を異にして立言するならば量的範圍の擴大といふ一貫した事實はこの場合言ひ能はざる事ではなければならぬであらう。こゝにも私共は觀點把持の不統一を發見せざるを得ない。而してこの不統一は將來實現せらるゝべき

「民族」を目してこれのみ固有の意味に於ける「民族」たるものと考へてゆかうとする傾きをもつマルキシズム的及びレーニイズムの民族理論における共通の先入見に基く。

(ホ) バウエルは民族を以て運命共同体であると規定すると共に民族以外にも運命共同体たるものが考へ得られぬかについてのあり得べき疑義に對して答へてゆくために注意深くも「同様な運命の下にたつ」といふ事柄と「同一の運命を共同に體驗する」といふ事態とを區別しようとした。だが然し運命の「同様」と運命の「同一」とは如何なる標準によつて區別さるゝものであらうか。勿論論理的に一般的に言ふ限り「同様」と「同一」とは全く別のものである事は疑ひを容れない。然し具體的現象に關しては何等かの具體的な標準をもつてくるのでない限り「同様」とみるか「同一」とみるかは見る人によつて異なるの不都合が招來せられよう。而してこの點に關して何等かの具體的標準をもつてこねばならぬといふ事は「運命の共同」といふ點のみを以てしては民族を定義づけるに充分ならざる事、運命共同体こそ民族であると見る事の論證がそれだけでは不充分である事を物語るものではないであらうか。勿論バウエルは具體例を擧げて「運命の類似」と「運命の同一」との相違を具體的に理解せしめようとしてゐる。無産階級は各國にわたつて「同様な運命」の下にたちつゝはあるが「同一の運命」は體驗しつゝあるものではないが故に各國にわたつて一つの民族を形づくるものではないと説く。だが然しこれは事實の敘述ではあつても説明ではないしこの敘述が學問的に嚴密な説明となつてゆくためには全く別の標準を掲げ出してくるの外はなかるべき筈でなければならぬ。

(へ) 更に積極的に考へて見る。運命の共同といふ徴表のみを以てしては何故にある時代に限つて民族といふ集團形態が活潑に活動し出すのであるかを説明出来ない事チイグレルの既に指摘した所の如くである。<sup>8)</sup> 勿論この點については民族が活潑に動くか否かは民族の行動についての問題に止りこれとは無關係に民族の本質を見定める事は許されるとみる人があるであらうし更に進んでは民族の本質に關する規定は本來、民族の活動の盛衰とは没交渉になさるゝべきものであると解する人も考へ得られよう。けれども民族が活潑に活動せざる場合にあつては民族はその實他の集團の形に於て存するもの、より端的にいふならばその場合には全く存在せざるものなのであり、活潑に活動する事自體の中に民族の本質が含まれてゐる事に着目しなければならぬ。活動せざる民族といふ如き表現はあり得べからざる事柄であり事實に於て活動せざる一定集團をも民族と呼ぶ事のあるのはその内容を常識的に理解する事から一步を進めて仔細に検討するならばいはゞ感情移入には非ざる感情移出に基いての事であるともみていゝ。この點を詳細に説明する事は民族の本質を「理念」に於ける集團であるともしようとする私の立場を論じた別の場合に譲つてこゝでは唯問題の所在のみを明白にしておく。第二に「運命の共同」といふ徴表のみを以てしては等しく民族と呼べるゝ集團の範圍内にあつても例へばある地方にして共同の運命を有する集團が存在する場合民族とこの民族圏内の集團とを區別する所以のものが見出され得ないであらう。かくして以上の第一、第二の批評を綜合していふならば運命の共同といふ徴表は一個の集團の範圍を限定するのによく役立ち得てもかく限定せられた集團が何故に民族と特に呼べるゝかの理由の説明には不充

8) H. v. Ziegler; a. a. O., S. 51 f.

分であるといはなければならぬであらう。

(ト) パウエルの運命共同體説が一つの優れたる「包括的試み」(チイグレル)である事既に述べた所の如くである。だが然しこの優れたものであるには違ひない試みにも「包括的試み」であらうとするためには企て残されてゐる一つの點が存在する。民族解釋としてかなり早くわけても佛蘭西系統の民族理論家の間に多く試みられてゐる立場に國家又は法的秩序、若しくは政治的秩序との關聯に於て民族の本質を見定めようとするものが存在する。パウエルの運命共同體説はこの立場に對して何等かの態度を見定めてゐない憾みをあましてゐる。勿論この點は運命共同體説そのものにとつて致命的な事情ではないが包括的な試みであらうとするためには一つの缺陷、しかもこの關説し忘れられた立場が有力なものであればあるだけかなりの缺陷であると考へなければならぬであらう。